

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

セル ガイド

- ① 祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ② 互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ ディポジションの分かち合いをします。
- ④ セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族のでいいのです。

- ① この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと？
- ② この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか？（または誉めたいですか？）1つだけ。
- ③ 聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか？
- ④ 互いの必要のために祈りましょう。

デーヴォ ガイド



2021.9.27-10.3

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ① お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。（2～3つ）
- ② 1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③ 礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディポジションの分かち合い（なるべく短く）
- ④ 預言の祈り（主の御心を宣言して祈り）をします。

5:1 年寄りをしかってはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い人々には兄弟に対するように、

5:2 年とった婦人々には母親に対するように、若い女々には真に混じりけのない心で姉妹に対するように勧めなさい。

5:3 やもめの中でもほんとうのやもめを敬いなさい。

5:4 しかし、もし、やもめに子どもか孫かがいるなら、まずこれらの者に、自分の家の者に敬愛を示し、親の恩に報いける習慣をつけさせなさい。それが神に喜ばれることです。

5:5 ほんとうのやもめで、身寄りのない人は、望みを神に置いて、昼も夜も、絶えず神に願いと祈りをささげていますが、

5:6 自堕落な生活をしているやもめは、生きてはいても、もう死んだ者なのです。

5:7 彼女々々がそしりを受けることのないように、これらのことを命じなさい。

5:8 もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。

5:9 やもめとして名簿に載せるのは、六十歳未満の人でなく、ひとりの夫の妻であった人で、

5:10 良い行ないによって認められている人、すなわち、子どもを育て、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人を助け、すべての良いわざに務め励んだ人としなさい。

5:11 若いやもめは断わりなさい。というのは、彼女々々は、キリストにそむいて情欲に引かれると、結婚したが、

5:12 初めの誓いを捨てたという非難を受ける

ことになるからです。

5:13 そのうえ、怠けて、家々を遊び歩くことを覚え、ただ怠けるだけでなく、うわさ話やおせっかいをして、話してはいけないことまで話します。

5:14 ですから、私が願うのは、若いやもめは結婚し、子どもを産み、家庭を治め、反対者にそしる機会を与えないことです。

5:15 というのは、すでに、道を踏みはずし、サタンのあとについて行った者があるからです。

5:16 もし信者である婦人の身内にやもめがいいたら、その人がそのやもめを助け、教会には負担をかけないようにしなさい。そうすれば、教会はほんとうのやもめを助けることができます。

教会は神の家族ですから、その指導者であり模範ともなるべきテモテには、家族のように接するようにとアドバイスが与えられています。教会の交わりというのは、良いところだけを見せるために表面的だけで終わるのが御心ではありません。親しい交わりによって、人は本当の姿を正直に出して、そこから成長できるのです。

「やもめ」のように、教会が支援すべき人について、ここでパウロが教えています。大切なのは、家族が支えるという本来の姿、本当に必要な人の支援、そして支援によって「非難」を受けるような生活にならないように…ということです。

教会の交わりでは金銭的な援助を求める人も現れかも知れません。しかし、何でも差し上げれば良いというものではありません。互いに主の栄光と証しのためにどうするべきかを考えましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



5:17 よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。

5:18 聖書に「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけません。」また、「働き手が報酬を受けることは当然である。」と言われているからです。

5:19 長老に対する訴えは、ふたりか三人の証人がなければ、受理してはいけません。

5:20 罪を犯している者をすべての人の前で責めなさい。ほかの人をも恐れさせるためです。

5:21 私は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使いたちとの前で、あなたにおごそかに命じます。これらのことを偏見なしに守り、何事もかたよらないで行ないなさい。

5:22 また、だれにでも軽々しく按手をしてはいけません。また、他人の罪にかかわりを持つてはいけません。自分を清く保ちなさい。

5:23 これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のためにも、少量のぶどう酒を用いなさい。

5:24 ある人たちの罪は、それがさばきを受ける前から、だれの目にも明らかですが、ある人たちの罪は、あとで明らかになります。

5:25 同じように、良い行ないは、だれの目にも明らかですが、そうでないばあいでも、いつまでも隠れたままでいることはありません。

ここで言われている「尊敬」とは「報酬」を意味しています。主のためにフルタイムで働いている人への報酬は、査定ではなく尊敬の度合いを表わすということです。この場合の尊敬とは、その働きに對

するものでしょうから、働きのための費用も含めて「二重に」という意味かもしれません。二重というのは必ずしも二倍とは限りませんが、十分に働きができるように…という考え方でしょう。

指導者は長老に限らず批判を受け易いものですから、その訴えを聞くにあたっては慎重でなければなりません。ただし本当に罪を犯しているなら責める必要があるということです。

「按主」とは、牧師など教会にの指導者を認めて、職に任じるための祈りです。これなしで教会を牧している人は、自称牧師であって公同の教会からは認められていないこととなります。それほど大切な按主ですから、「だれにでも軽々しく按手をしてはいけません。」とパウロが言うのももっともです。これらは教会が聖書の教えから離れて行くことがないための秩序です。

罪や良い行いは必ず「明かになる」というのが、神の国の鉄則です。主に安心して委ねましょう。主に報いていただき、さばいていただき、勝利を取っていただきますように。

愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、



6:1 くびきの下にある奴隷は、自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。それは神の御名と教えとがそしられないためです。
6:2 信者である主人を持つ人は、主人が兄弟だからといって軽く見ず、むしろ、ますますよく仕えなさい。なぜなら、その良い奉仕から益を受けるのは信者であり、愛されている人だからです。あなたは、これらのことを教え、また勧めなさい。

6:3 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、

6:4 その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、
6:5 また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。

6:6 しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。

6:7 私たちは何一つこの世に持って来なかったし、また何一つ持って出ることもできません。

6:8 衣食があれば、それで満足すべきです。

6:9 金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。

6:10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。

パウロは全ての人は神の前に平等であると考えていました。しかし当時の社会には奴隷制度があり、主のみこころに反していたのです。しかし、パウロは社会制度を形だけ変えようとしたのではありません。人の心から変えようとしたのです。仮に制度を変えても、人の心に不平等な考えがあるなら、また同じことが始まるからです。その心とは罪から来ていることは言うまでもありません。

むしろ私たちはどんな制度の中にも、主の祝福と恵の中に生きることができるのです。パウロは奴隷達にその生き方を示しました。私たちも仕事や人間関係において、「ますますよく仕え」ることで、益を受けるでしょう。それは主の栄光を表わすみこころです。

「敬虔」とは主のみこころを歩むことです。またそのようなライフスタイルです。「これに同意しない人」は、自分の好き勝手に生きたいがために、歪んだ自説を主張する人であって、「紛争」のもとになります。敬虔でありましょう。

その敬虔は神のみこころを第一に喜ぶ生き方ですから、お金を第一にすることはありません。金銭は大切ですが、必要以上にそれを求める人は「金持ちになりたがる」人で、結局金銭トラブルや罠にかかり、「自分を刺し通す結果になります。「衣食」すなわち生きるだけのものがあれば十分です。それで「満足する」ところから人生を始めましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



6:11 しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。

6:12 信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告白をしました。

6:13 私は、すべてのものにいのちを与える神と、ポンテオ・ピラトに対してすばらしい告白をもってあかしされたキリスト・イエスの御前で、あなたに命じます。

6:14 私たちの主イエス・キリストの現われの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。

6:15 その現われを、神はご自分の良しとする時に示してください。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、

6:16 ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることのできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のもので。アーメン。

6:17 この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。

6:18 また、人の益を計り、良い行ないに富み、惜しまずに施し、喜んで分け与えるように。

6:19 また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように。

6:20 テモテよ。ゆだねられたものを守りな

さい。そして、俗悪なむだ話、また、まちがって「靈知」と呼ばれる反対論を避けなさい。

6:21 これを公然と主張したある人たちは、信仰からはずれてしまいました。恵みが、あなたがたとともにありますように。

テモテへの厳かな勧めです。本当に必要なことは、このようにストレートに語るべきでしょう。テモテのたましいに響いたはずです。信仰を守り通すことは「戦い」でもあります。決して情性やいい加減なことでは乗り越えられない時があるのです。主はやがて御自身を表わす方、すなわちその教えの正しかったことを明かになさる方ですから、信仰を守り通しましょう。「とこしえの主権は神のもの」だからです。

ここでパウロはもう一度、富に関する戒めを書いています。「富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。」とは、自分の力で豊かになったを思わないためです。

また「富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように」と、智よりも重要なものがあるのだと言っています。それは「まことのいのち」です。この問題を、この祝福を、この幸いを最優先にしましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



➤ 1日 金曜

ヨブ



1:1 ウツの地にヨブという名の人があった。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。

1:2 彼には七人の息子と三人の娘が生まれた。

1:3 彼は羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭、それに非常に多くのしもべを持っていた。それでこの人は東の人々の中で一番の富豪であった。

1:4 彼の息子たちは互いに行き来し、それぞれ自分の日に、その家で祝宴を開き、人々をやって彼らの三人の姉妹も招き、彼らといっしょに飲み食いするのを常としていた。

1:5 こうして祝宴の日が一巡すると、ヨブは彼らを呼び寄せ、聖別することにしていった。彼は翌朝早く、彼らひとりひとりのために、それぞれの全焼のいけにえをささげた。ヨブは、「私の息子たちが、あるいは罪を犯し、心の中で神をのろったかもしれない。」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにしていた。

ヨブ記のテーマは「なぜ正しい人も苦しむのか」ということです。ヨブは神に褒められるほど正しく、また祝福されていました。ここではヨブの正しさと敬虔さが記されています。誰もが「あの人なら」と思ったことでしょう。

しかし、神はそのような人にも試みにあわせることがあるのです。そのことを知しましょう（苦しみにあわせるのはサタンですが、神がそれをも容認するということです）。病や災難にある人を見て、「何た罪があるからだ」との浅慮はやめましょう。またそのような試みの時には、神の大いなるご計画があって、必ず回復と祝福があると信じましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



➤ 2日 土曜

ヨブ



1:6 ある日、神の子らが主の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた。
1:7 主はサタンに仰せられた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは主に答えて言った。「地を歩き巡り、そこを歩き回って来ました。」
1:8 主はサタンに仰せられた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいないのだが。」
1:9 サタンは主に答えて言った。「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。
1:10 あなたは彼と、その家とそのすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地にふえ広がっています。
1:11 しかし、あなたの手を伸べ、彼のすべての持ち物を打ってください。彼はきっと、あなたに向かってのろくに違いありません。」
1:12 主はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」そこで、サタンは主の前から出て行った。

ここで分かることは、サタンが苦しみの根源であり、神様がサタンのしわざを容認するということです。実際にこのような会話が合ったかどうかは分かりません。私たちにサタンの特質と神様のみこころを理解しやすく表現したのかも知れません。
ただ分かることは、ヨブのように正しい人も苦しみに会うのだということです。それは神様の気まぐれなどではなく、深いお考えがあってのことです。私たちは苦しみに会ったときは、そこに神様のみこころがあって、それを苦しさの中から学ぶのだと、

思いを切り替えることです。とは言え、それほど簡単ではありません。ヨブも相当な葛藤の中でようやく主のみこころを悟ることができました。まずは神様にゆだねましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



➤ 3日 日曜

ヨブ

1:13 ある日、彼の息子、娘たちが、一番上の兄の家で食事をしたり、ぶどう酒を飲んだりしていたとき、

1:14 使いがヨブのところに来て言った。「牛が耕し、そのそばで、ろばが草を食べていましたが、

1:15 シェバ人が襲いかかり、これを奪い、若い者たちを剣の刃で打ち殺しました。私ひとりだけがのがれて、お知らせするのです。」

1:16 この者がまだ話している間に、他のひとりが来て言った。「神の火が天から下り、羊と若い者たちを焼き尽くしました。私ひとりだけがのがれて、お知らせするのです。」

1:17 この者がまだ話している間に、また他のひとりが来て言った。「カルデヤ人が三組になって、らくだを襲い、これを奪い、若い者たちを剣の刃で打ち殺しました。私ひとりだけがのがれて、お知らせするのです。」

1:18 この者がまだ話している間に、また他のひとりが来て言った。「あなたのご子息や娘さんたちは一番上のお兄さんの家で、食事をしたりぶどう酒を飲んだりしておられました。

1:19 そこへ荒野のほうから大風が吹いて来て、家の四隅を打ち、それがお若い方々の上に倒れたので、みなさまは死なれました。私ひとりだけがのがれて、あなたにお知らせするのです。」

1:20 このとき、ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝し、

1:21 そして言った。

「私は裸で母の胎から出て来た。
また、裸で私はかしこに帰ろう。」



主は与え、主は取られる。
主の御名はほむべきかな。」

1:22 ヨブはこのようになっても罪を犯さず、神に愚痴をこぼさなかった。

ヨブはまたたくまに、家畜と使用人、それに子どもたちとその家族をも失いました。まるで世界の災害が全て自分に集まって来たかのようにでした。彼は着物を引き裂き、頭をまるめて、その苦しみを表したほどです。そしてその耐え難いもだえ苦しみの中から、21節の信仰にたどり着いたのです。

ヨブには「主に与えられた」という主権を認める信仰、「かしこに帰ろう」という永遠のいのちの信仰があったから、このように主に罪を犯さなかったのです。苦しみにあるならそのようなヨブを模範としてみましょう。簡単ではないかもしれませんが、そこに脱出の扉があるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

